

参考文献の書き方(文系・社会科学)

経済学研究科 高城 菜奈子

レポートや卒業論文を書く際にどの本(論文・記事・インターネット)のどの部分を参考にしたのかを明記せずに、記載されている考えや意見をそのまま使用することは厳禁です。これは一語一句同じ場合でも、言葉が多少異なっている場合でも同様です。逆に言えば、出典さえ明記すればいろんな考えや意見を論文に生かすことができます。図書・論文・記事の著作権を保護することはもちろん、倫理上の問題として「出典を明らかにする」という最低限のルールを守りましょう。

＜参考文献の要素＞

参考文献を書く際に必要な要素は、その論文を探す際に必要な情報です。簡単に言えば、「誰が・いつ・どの本(論文・記事)で」発表した考え・意見なのかを示せばいいのです。以下、いくつか具体例を提示します。

●図書・雑誌

＜注意点＞

- ・和文の図書名は『』、論文名は「」
- ・外国語の図書名はイタリック、論文名は“ ”
- ・出版社の本社所在地が書いてある場合があるが、なくても可。
- ・最後に発行年を書く場合もあれば、著者名の後に書く場合もある。お好みです。

例) 伊勢崎賢治『武装解除紛争屋が見た世界』

講談社現代新書、2004年

伊勢崎賢治(2004)『武装解除紛争屋が見た世界』

講談社現代新書

1. 図書がひとつの論文の形になっている場合

→著者名、『図書名』出版社、出版年

和文【例】篠田英明『平和構築と法の支配 国際平和活動の理論的・機能的分析』創文社、2003年

外国語【例】M,Weller.ed,Regional Peace-keeping and International Enforcement:theLiberian Crisis, Cambridge University Press, 1994

2. 図書の中に複数の論文が入っている場合

→論文の著者、「論文名」本の著者・編者『図書名』出版社、出版年、掲載ページ

和文【例】石原直紀「平和維持と平和構築」大芝亮編

『国際政治学入門』ミネルヴァ書房、2008年

外国語【例】Kees Kingma, “Post –war Demobilization, Reintegration, and Peace-building”, Herbert Wulf ed.Disarmament and Conflict Prevention in Development Cooperation, Bonn International center of Convention Report 14, 2000

3. 雑誌

→論文の著者「論文名」発行者・出版社、『雑誌名』巻・号、出版年、掲載ページ

和文【例】真島一郎「リベリア内戦の展開」日本アフリカ学会『アフリカ研究』43号、1993年、77-97

外国語【例】Boas Marten, “Liberia and Sierra Leone-dead Ringer? The logic of neopatrimonial rule”, Third World Quarterly vol.22,no5,2001,697-723

※紀要(大学が発行する雑誌)の場合、発行者名が大学名になる。

※巻・号は省略して書く場合もある。25号1巻→25(1)

●インターネット

＜注意点＞

- ・引用箇所のあるサイトURL、アクセス日を必ず明記する。(引用サイトが後から見たときに、なくなっている場合や更新されて内容が変更している場合があるため)

【例】United States Institute of Peace, Comprehensive Peace Agreement Between the Government of Liberia and the Liberians United for Reconciliation and Democracy (LURD) and the Movement for Democracy in Liberia (MODEL) and Political Parties, Peace Agreement Digital Collection,2003
www.usip.org (2012年7月10日アクセス)

●インターネットから論文をダウンロードした場合

＜注意点＞

- ・PDFで論文をダウンロードした場合、ページ数が記載されていないことがよくあります。この場合、特にページ数の表記は必要ありませんがインターネットからダウンロードした旨を明示します。

福島大学附属図書館

〒960-1293 福島市金谷川1番地

●お問い合わせ(利用者サービスチーム)

024-548-8087 sabisu@lib.fukushima-u.ac.jp

http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/lc/

話ができる 学習エリア 福島大学附属図書館 ラーニングコモンズ

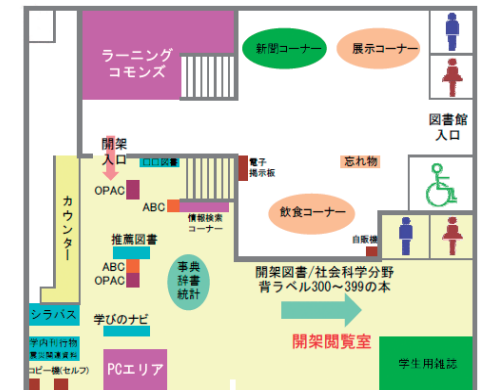


ポスター 4 種 人間発達文化学類 八巻みゆきさんデザイン

2012年4月よりスタートした、本学学生・院生のための学習エリアです。従来の閲覧室/PCエリアなど静寂な「個」のための学習環境に加え、図書館の資料や機器を使いながら、周囲に気兼ねせずに対話ができるフリースペースとして設置しました。さらに、同年7月からは、院生アドバイザーによる学習相談受付を開始しています。ラーニングコモンズとは、ひとりでもグループでも気軽に立ち寄って学びの刺激を受けられる…学生の皆さんにとってそのようなスペースとなるよう目指しています。

利用案内

- 備付パソコン、デスク、ホワイトボードなどがあります。キャスターつきのものは、自由に移動して利用できます。
- プロジェクタ、ノートパソコンを貸出します(要申込)
- 蓋付の飲み物を持ち込みできます。食事はできません。食事は「飲食コーナー」でお願いします。
- カラープリンタを利用できます。(白黒@10円/カラー@50円)



図書館 1F 平面図



4 月 開始直後の様子

10 月 ビブリオバトル首都決戦(福島予選)

必見!院生アドバイザーが伝授する学びのワザ

レポートの書き方(理工)

共生システム理工学研究科 猿田 祐平

みなさん一度は講義やゼミでレポートの提出をしたことがあると思います。特に理工学類は実験や演習のレポートなどを多く書くことになります。しかし、実験のやりかたは教わっても、レポートの書き方までは詳しく教わりませんよね。結果がしっかりと出ているにもかかわらず、レポートの書き方によっては低い評価を受けてしまうことも珍しくありません。そこで、レポートを書く際にどういったことに注意すれば良いかをまとめました。絶対的にこの書き方が正しいということではなく、あくまで一例として見ていただければ幸いです。

悪い例

○×基礎実験レポート

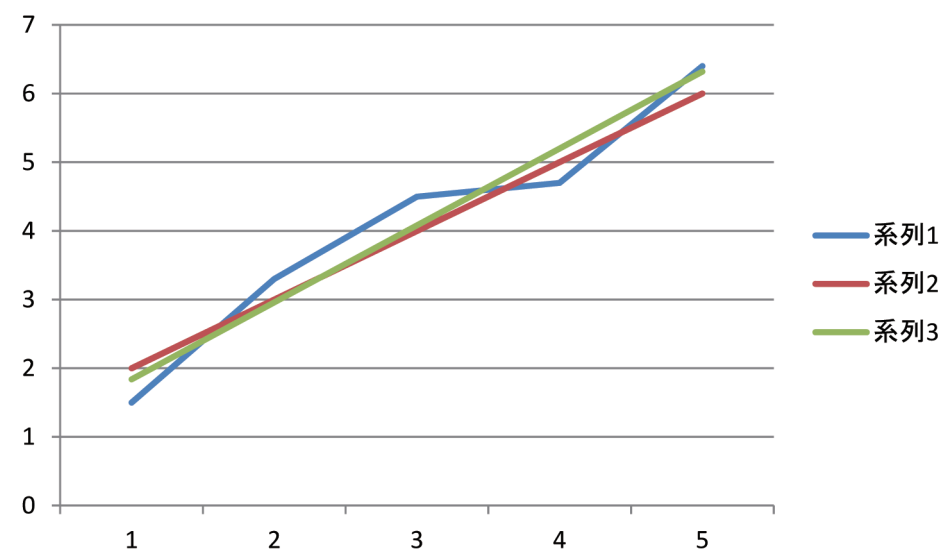
学籍番号:123456789
氏名:金谷川 太郎

課題:表1に示すような点群を最小二乗法を用いて直線近似せよ。なお、レポートをまとめる際にはWordやExcelを用いること。レポートは印刷しホッチキス等でまとめ、4月12日17:00までに教授室前のレポートボックスへ提出すること。

表1 提示された点群

時間	距離(誤差含む)	距離(理論値)
1	0.7	1.0
2	2.3	2.0
3	3.5	3.0
4	3.7	4.0
5	5.1	5.0

解:結果を以下の図に示す。



良い例

○×基礎実験レポート

学籍番号と提出日を忘れないように

提出日:2012.04.10
学籍番号:123456789
氏名:金谷川 太郎

課題や問題文は簡潔に書く

課題:表1に示すような点群を最小二乗法を用いて直線近似せよ。

表1 提示された点群

時間	距離(誤差含む)	距離(理論値)
1	0.7	1.0
2	2.3	2.0
3	3.5	3.0
4	3.7	4.0
5	5.1	5.0

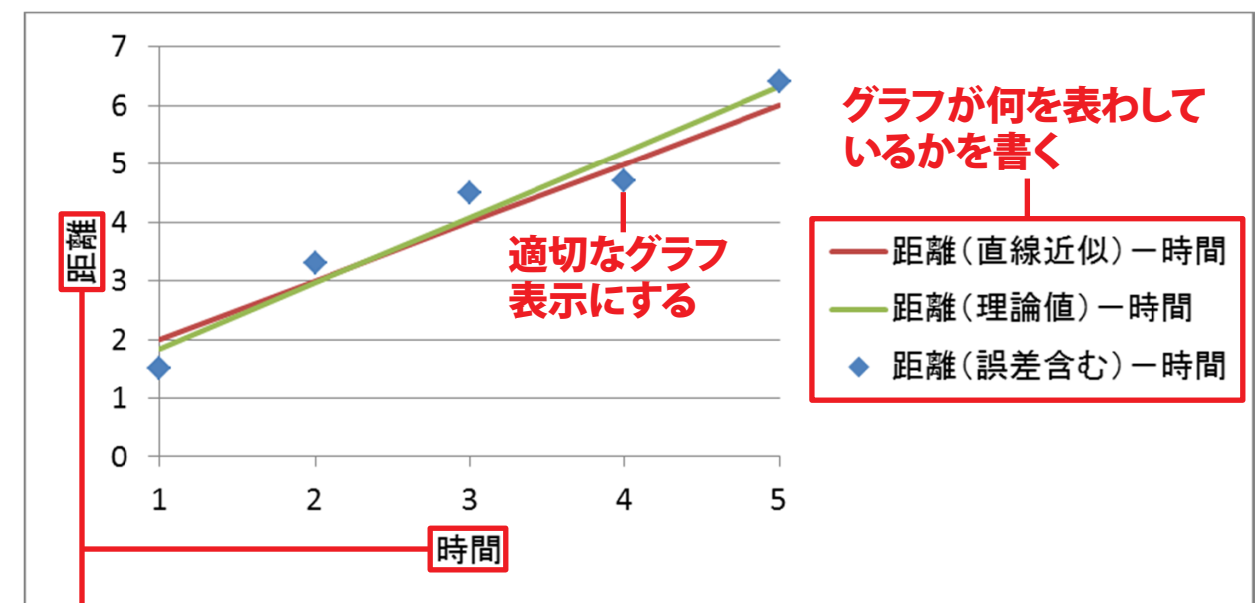
表題は上
図題は下

解:最小二乗法について述べた後、1のY軸点群を図1に示す。
ある点群がある場合、以下の直線の式を用いて近似することができる。

$$(x_1, y_1), (x_2, y_2), (x_3, y_3), \dots, (x_n, y_n)$$

$$y = ax + b$$
$$a = \frac{n \sum_{i=1}^n x_i y_i - \sum_{i=1}^n x_i \sum_{i=1}^n y_i}{n \sum_{i=1}^n x_i^2 - \left(\sum_{i=1}^n x_i \right)^2} \quad b = \frac{\sum_{i=1}^n x_i^2 \sum_{i=1}^n y_i - \sum_{i=1}^n x_i y_i \sum_{i=1}^n x_i}{n \sum_{i=1}^n x_i^2 - \left(\sum_{i=1}^n x_i \right)^2}$$

使用した式
なども書く



縦軸と横軸が何を
表わしているかを書く

グラフが何を表わして
いるかを書く

参考文献: <http://hooktail.sub.jp/computPhys/least-square/>

インターネットの正しい使い方(基礎編)

共生システム理工学研究科 首藤 光太郎

1. はじめに—インターネットはなぜ危険か？

大学の講義で耳がタコになるほど聴かされる言葉の一つに、「インターネットを簡単に信用するな」とか「インターネットは文献ではない」といったようなものがあると思います。これを言われたいような課題があるとすれば、それはその情報の真偽が誰が見てもわかるような普遍的な定理を扱うか(運動方程式は誰が見ても変わりません)、もしくはその真偽がさほど重要でない場合(たとえばインターネット上の情報を扱ってレポートを書く…など)のどちらかでしょう。確かにインターネット上の情報にはしばしば信憑性の疑わしいものがあります。多くの人が手軽にアクセスができるというシステムは、多くの人が手軽に情報を発信することができるというシステムの上に成り立っているものであるためです。情報源の発信が手軽であることは、その情報の真偽を疑う上では非常に致命的です。

情報量と人数の規模はインターネットに比べ遥かに縮小しますが、似たようなものに、両親(特に母親)による近所の井戸端会議の情報網があります。大学生なら誰もが経験のあることだと思いますが、例えば自分が学校で何かしらの失敗をしたとします(テストで悪い点を取った、女の子を好きになってしまった、ガラスを割った…など)。その内容が両親にバレます。するとなぜか、どういシステムなのかはしりませんが一週間もすれば近所中に失敗が知れ渡ってしまいます。悲しいことに“尾ひれ”がついて。こうなってしまうばもう打つ手はありません。

弁解をしたとしても、その弁解を参加した全ての人へ広げるのは非常に困難でしょう。なぜなら、情報の“拡散速度”は情報の“面白さ”に比例するためです(あくまで自分の経験則ですが)。弁解後の情報が弁解前よりも面白いということでもない限り、弁解後の情報が定着することはまずありません(これも自分の経験則です)。

情報の拡散は井戸端会議に参加する手軽さによって引き起こされるものです。そして、尾ひれのついた情報は残念ながら簡単には消えません。人のうわさも75日といいますが、たった一週間で広がった情報に2ヵ月半も悩まされるなんてたまったものではありません。情報に“尾ひれ”がつく、一度広まった情報は情報源が削除、訂正しようと中々定着しない、ここにインターネットの危険性が存在します。

しかし現在、インターネットの規模は他に類を見ません。莫大な情報量と広大な情報網がもたらした功績は数知れず、もちろん学問の発展にも大きく寄与しています。例えば植物の和名を入れるとシノニム(異名)を含めた学名とその記載に関する文献情報を検索できる(「BG Plants 和名ー学名インデックス」(YList):http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html), 調べたい生物のDNAの塩基配列情報を検索できる(DDBJ:<http://www.ddbj.nig.ac.jp/>) など、(恐らく生物分野には全く関係のない人にとって)重箱の隅をつつくようなそのユニークさは我々の想像をはるかに超えており、インターネットが学問に与えた功績を正確に把握するのは困難でしょう。つまり、講義ではインターネットの使用を推奨しない大学教授も、裏ではその恩恵を受けている場合がほとんどです。彼らは「インターネットを簡単に信用するな」とか「インターネットは文献ではない」と言っているのであって、「インターネットを使うな」とは言っているわけではないのです。要するに「モノは使いよう」です。

では「使いよう」とは何か?どのような情報を信用していいのか?次はこのあたりを具体的に書いていこうと思います。

2. インターネットの使い方

2-1.「引用」と「参考」

「参考文献」と「引用文献」という言葉があります。前者は学生が作るレポートではよく見かける一方、後者はあまり見かけない印象を受けます。言葉上、この両者の間にはレポートを作成する上で「参考したか」「引用したか」という違いがあります。要するに「調べてはみたけど使えそうにない文献」を掲載するのが「参考文献」、そうでないのが「引用文献」です。

論文を書くとき(卒業論文もこれに入ります)、基本的には「参考文献」という言葉は使いません。筆者が論じたいことに必要な情報以外は出来る限りこそぎ落としていくのが一般的な論文のスタイルです。なので、「この論文を作る上でこれだけ勉強しましたので載せておきます」というような関係のない記述はいりません。筆者が引用した情報を読者がチェックできればそれで十分、というわけです。一方で、学生を書くレポートには基本的に評価がつきます。特別な事情があって勉強したことをアピールしたい時などには、もしかしたら参考文献という言葉が必要なかもしれません。

2-2. インターネットは「引用」できるか？

結論から先に書くと、インターネット上の情報は特別なサイトを除き基本的には引用しません。そもそも引用文献という欄は読者が引用した情報元をチェックできるように用意するものです。情報の真偽以前に、インターネット上の情報はいつ削除されてしまうかわかりません。そうなったら読者はその情報元にたどり着くことができなくなってしまいます。これはレポートでも同じで、もしレポート上の記述が間違っていたときに、教授がその情報にアクセスしチェックできるか否かは成績の評価をする上で非常に重要なポイントです。

2-3. 特別なHPとは…？

では前述の「特別なサイト」とはなんのでしょうか?基本的に僕が用いる、もしくはデータを使ってもいいと普段から思っているのは以下の3つです。

! インターネット上にアップロードされている文献(論文や本)のpdfファイルを引用する。
研究目的で文献を探す際の最も一般的な方法です。電子書籍やインターネット環境の発展などによって、近年探したい文献がインターネット上に、スキャンされpdfファイルなどの形でアップロードされていることは少なくないです。特に英論文などは尚更です。

論文自体を探すには日本語論文に関してはcinii(<http://ci.nii.ac.jp/>), 英論文に関しては(<http://scholar.google.co.jp/>)などを用います。専門分野によってはさらに他の検索エンジンがある場合があります。

ただし、インターネット上には様々なpdfファイルがアップロードされています。どこぞの大学の学生が作ったレポートからよくわからない報告書、家電の取扱説明書までその内容は様々です。引用できるようなものかそうでないのかの判断に気をつけましょう。特に、このようなレポートや大学教授が作った講義のレジュメやスライドのファイルを引用してしまうというミスにそれまで論文というものに触れたことのないような大学1,2年生などにとって陥りがちです。現在、基本的に引用できるかどうかの基準は、「その文献ファイルが本来は紙媒体として出版されていること」ですが、そのうち紙媒体として発行されない学会誌なども出てくるかもしれません。

! 公的機関がインターネット上で公開しているデータを使用する。
気象庁(<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)が公開している過去の気象データや、国土地理院が公開している地形図(<http://watchizu.gsi.go.jp/>)などが含まれます。

僕は専門分野上あまり使用することはありませんが、このようなデータを多く使用する専門分野もあるようです。

! 研究者が作ったインターネット上のシステムやソフトを使用する。
植物の和名を入力するとそれまでその植物につけられた異名と文献が表示されるYlist(米倉浩司・梶田忠(2003-)「BG Plants 和名ー学名インデックス」(YList), http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html (2012年7月26日))や、塩基配列の分析に使用するフリーソフトであるClustalX(<http://www.clustal.org/>)などが含まれます。引用する時に推奨する形式が示されていたり、そのソフトを発表した時の論文のpdfファイルがアップロードされていたりなど引用方法は様々です。しかし、論文を書くときはとにかく、講義のレポートでこのような引用形式が求められることは稀です。